

Title	古代ロシア語における主 = 対格と生 = 対格の価値に関する一考察
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 33-34
Issue Date	1998-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/65837">http://hdl.handle.net/2433/65837</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 古代ロシア語における主＝対格と 生＝対格の価値に関する一考察<sup>1</sup>

スラヴ諸語は、名詞的変化の形式において、所謂活動体と不活動の区別を有する。その形態的特徴は、主として対格にあり、活動体がこれを生格と等しくするに對し、不活動体は主格と同形である。現代ロシア語では、この区別は男性単及び複数、並びに女性複数に行われるが、初原的には男性単数にのみ見られた現象であり、男性及び女性への拡大は比較的後代のことに属する。その発生は、通常、音韻変化の結果生じた主・対格形の同一化に起因する、格の混同を回避せんとする作用に帰せられている。独自の語尾を有する女性単数対格にこの区別が行われぬ事は、この説を支持するものようであるが、主・対格形を異にする男性複数が、何故、これを同じくする女性複数に先んじてこの区別を行うに至ったかを説明するものではない。

不活動体が主・対格を形態的に区別しない事に関して、不活動体がそれ自身行為の主体となり得ない為であるとする説明にも、幾多の疑問がある。不活動体名詞も主格を有しているという事実を別としても、例えば等しく行為主体たり得る活動体名詞において、生＝対格形は先ず人名に使用され、次いで人を表わす普通名詞、最後に動物名に及ぶこと、又1・2人称代名詞における生＝対格形の使用は、極めて早い時期に固定するが、3人称の場合には著るしく遅れ、普通名詞より後に至ってようやく一般化すること等、語群によるこの区別の滲透度の相違を如何に説明す可きであろうか。

このように生＝対格の一般化が他の範疇及び語彙的意義と深く関わり合っていることからすれば、この範疇の成立は、寧ろ両形の価値の相違によるところが大であったとみるのが自然である。メイエが古代スラヴ語の主＝対格形 рабъ「奴隸」がギリシア語原典の δοῦλονに、生＝対格形 раба が τὸν δοῦλον に、夫々対応する事を指摘し、クズネツオフが主＝対格形は社会的に完全な権利を有しない人物を表わす語に使用される傾向があると述べているのは、何れも卓見であるが、クズネツオフの所説に見られる如くこれらの現象を或いは定性 (определенность) と不定性 (неопределенность) の対立、或いは社会関係の言語への反映、というように、いわば場合毎に新たな概念を導入することに依って説明しようとするのは、この点の考慮が不充分であったことに起因するものではなからうか。問題は、如何にしてこのような言語外的現象が、主＝対格、或いは生＝対格というが如き言語手段によって表現されるに至ったかを明らかにする事ではなければならない。古代ロシア語文献中最古のものに属するノヴゴロド原初年代記シノダリ本について、この点を

<sup>1</sup> 『日本ロシア文学会報』第5号 1962年10月 49-50頁。  
なお、引用の古代ロシア語の単語に付した訳は原文にはない。

考察しようとしたのが、発表の主旨であった。

結論的に言えば、生=対格形と主=対格形の価値の相違は、個別と聚合の対比にあると思われる。主=対格形が対象の聚合性を示すのに対し、生=対格形はその個別性を強調する。生=対格形はより明確であり、個性的であり、具体的である。主=対格形はこれに対して、より没個性的、より抽象的であるということができよう。

生=対格形が先ず人名に一般化したのもこの故であり、単数形に現われ易いのも又この為であった。逆に人を現わす普通名詞(指人名詞)以外の活動体名詞(i.e. 動物名)に拡大することが遅かったことも又当然と考えられる。

シノダリ本において、指人名詞の生=対格形が、教会・宗教関係の人物を表わす語、社会的に身分の高い人物を表わす語等、一般に何等かの点で他と明確に区別される可き個性を有する語に現われる事は、このような個別性の強調という本来の職能が、未だ十分に鮮明であった事を示すが、これらの例は、又、このような職能を支えるものが、対象に対する価値の判断であったことを示していると思われる。

ここから文体論的使用の可能性も生ずるのであるが、новгородцевъ「ノヴゴロド人」、новоторжцевъ「ノヴィ・トルグ人」のように、自己の陣営に属する住民を示す語が、通則に反して生=対格をとる傾向のある事も、このような価値判断の然らしむる所であろう。又 гридь「親兵」、полонь「捕虜」等、形式的には単数であり乍ら、集団としての対象を指示する語、шуринъ「妻の兄弟」等、親族関係において下位にあるもの、社会的に身分が低い人物を表わす語、異民族を表わす複数名詞等が、主として主=対格形をとることについては、最早、説明の要はない。しかし乍ら、親族関係を示す語の場合、下位に属し乍らも生=対格形をも有する сынъ、вънукъ「孫」等に対し、主=対格形のみを有するのは、зять「女婿」、шуринъ「妻の兄弟」、сыновъць「甥」の如く外戚に限られて居る事から<sup>2</sup>、ここにも価値の判断が強く働いている事が知られる。

以上の事から、クズネツオフの謂う、定性と不定性の対立、社会関係の言語への反映等も、実は個別性と非個別性、具体と抽象の差であるとせねばならないであろう。

3人称代名詞の場合、主=対格が、遺体・敵対する人物等を表わす場合に多く使用されているところからすれば、この代名詞の使用そのものが、余り個性の高くない人物の場合に限られていたという印象を受ける。生=対格形の一般化が遅れた理由は、このような所にあるのではないと思われる。1・2人称代名詞は、対話者の一方を指示するのでありその現実性の度合の高さにおいて、3人称代名詞とは、本質的に異なっている。

(詳細は近く論文として『古代ロシア研究』第2号に発表の予定になっている。)

<sup>2</sup>ここで сыновъць は「兄弟の子」であって、これを外戚としたのは誤りである。直系ではないとすべきであるかも知れない。